



2011

TOYOTA BIG AIR

記念すべき15回大会は、外国人選手の独壇場となった。非公式ではあったが、日本人最終予選での、ライダーの姿を見た限り、スノーボードを知っている誰しものが、「日本人が外国勢に勝てる日は、いつくるのだろうか?」、と率直に思った大会でもあった。720で本戦に上がれる国際大会は、他にはあるはずがない。

TOYOTA BIG AIRは、毎年、札幌雪まつり大通り公園の特設キッカー「白い恋人PARK」で開催される予選で勝ち上がったライダーと、予選免除のライダーによる本戦への出場権をかけた非公開の日本人最終予選で幕を明ける。競技方法は、1ライダー2本のライディングによるベストポイントカウント方式。つまり2本のライディングの高い方を採用して、ポイント上位者に本戦の出場資格与えるのだ。今年から本戦出場の枠が7人に増えたものの、予選から考えると相変わらずの狭き門。プレッシャーを受けるアプローチ、気温の上昇による雪質の変化、といった様々な条件が、ライダーの豊富な経験とスキルを狂わせる。翌日の本戦に進めるのはたったの7人、しかも前日の公開練習とリップの角度が異なり、のっけから日本人予選は荒れ模様の様相をていしていた。

やはり大会は荒れた。中井孝治、嶋谷 仁、岸本浩樹、チョコバナラボール新井、岡本圭司、関 功といったそうそうたるメンバーがあっけなく姿を消した。そんな中、1本目で得意のスイッチバックサイド720を完璧にメイクした石川敦士がトップ通過、それに続いたのが2本目でフロントサイド1080を決めた藤田一茂、3位通過はスイッチバックサイドロデ720を炸裂させた熊崎圭人、フロントサイド900を決めた村上大輔が4位で通過、5位には吉田麻人（バックサイド720）、6位に高橋亮大（バックサイド720）、7位には子出藤歩夢（バックサイド720）らが見事本戦へのプラチナチケットを手に入れた。

ただ日本人最終予選で残念だったと思われるのは、ライダーの攻める姿勢や、ジャッジシステムだった。結果を見てもわかるように、7人中なんと5人が720という、国際大会にしてはあまりにもふがない戦いだったこと。ふと思ったこと、それは「クレバーに滑ったライダーが勝つ」そんな匂いのする日本人最終予選でいいのだろうか？確かに本戦出場のための大会ではあるが、だからといって、ライダーは攻める気持ちを封印して、なんの変哲もない720というトリックを選択してしまう、そんな程度の最終予選でいいのだろうか？また、そのレベルのトリックを、本戦出場の評価としてしまうジャッジシステムはいかがなものか？

非公開で開催された日本人最終予選は、今年から7名が本戦に出場できることになった。ただ、見ていた多くの人が「本戦出場を決めるには、あまりにもふがない大会」と感じたに違いない

日本人最終予選1位通過の石川敦士





TOYOTA BIG AIRは“キング・オブ・エア”と銘打つ世界最高峰の大会のはず。世界への登竜門であるにもかかわらず、チャレンジャーである日本人が守って滑って満足できるのだろうか、と思わざるを得なかった。今回選ばれた7人がダメだとことではなく、もちろん優れた技術を持っているライダーばかりだが、現在のスノーボードのコンペションを知る者すべての者が、疑問をもったのではないだろうか。招待選手のレベルを考えてみれば、「日本人なんか表彰台に立てっこない」、と思えてしまう。

いみじくも、チョコバナラボールが自身のブログでこう書いている。「自分の今回の結果についても色々考えさせられたけど、あれが自分にとって最良の選択だったと思う。コンディションや状況に応じて守った滑りをして順位を守るのはプロとして当然の行動かもしれない。でも、俺は順位を取るよりも外人に勝たなかった。SB1260を本戦でやるためには事前にSB900をどうしても立ちたかった。720にしたくなかった。その狙いは何もかなわず負けてしまったけれど、その気持ちは変えずにこれからの滑り、そしてまだこのような大舞台が続いてくれるのであれば来年にぶつけていきたいと思う」と。

日本人最終予選成績

- | | | |
|------------------|-------------------|------------------------|
| 1.石川敦士(埼玉県)/270 | 10.関 功(新潟県)/218 | 21.金子泰志(長野県)/156 |
| 2.藤田一茂(京都府)/265 | 11.藤本光海(札幌市)/217 | 22.西沢孝征(長野県)/134 |
| 3.熊崎圭人(岐阜県)/256 | 12.鈴木拓巳(新潟県)/214 | 23.鈴木翔太(新潟県)/128 |
| 4.村上大輔(札幌市)/246 | 13.稲村 樹(愛知県)/210 | 24.岸本浩樹(東京都)/118 |
| 5.吉田麻人(岩見沢市)/241 | 14.廣瀬匡和(長野県)/208 | 25.吉田啓介(旭川市)/99 |
| 6.高橋亮大(名寄市)/234 | 15.大竹延王(福島県)/200 | 26.山下龍(千葉県)/89 |
| 7.子出藤歩夢(小樽市)/228 | 16.上野恋慈(神奈川県)/198 | 27.谷口貴裕(名寄市)/79 |
| 8.岡本圭司(兵庫県)/226 | 17.工藤洸平(札幌市)/178 | 28.チョコバナラボール新井(埼玉県)/71 |
| 9.島田優也(名寄市)/221 | 18.吉田安亨(大阪府)/176 | 29.嶋谷 仁(赤平市)/67 |
| | 19.林崎哲也(名寄市)/174 | 30.中井孝治(倶知安町)/53 |
| | 20.横田真央人(愛知県)/162 | 31.岩淵直樹(福島県)/46 |

フラットスピンにあくまでもこだわり続け、見事優勝したチャズ



昨年の覇者ピートゥ・ピロイネンがベスト8で破れるというハイレベルな戦いが繰り広げられた。まさに、外国勢の強さをまざまざと見せつけられた大会であった

日本人予選の翌日に行われる本選は、風無し、気温-3.7度、快晴という絶好のコンディションの中、観客数：23,416人のオーディエンスが集まった。今回の招待選手は、例年になく世界のスペシャリストが集まり、本戦は相当ハイレベルな戦いが予想される中、キング・オブ・エア決定戦はスタートされた。まずは昨年から採用されたクォーターファイナルから行われるマン・オン・マン・トーナメント（ノックダウン方式）への出場権を得るための予選ラウンドが始まった。16人が2本ずつライディングして上位8名がクォーターファイナルに進出できる。

予選ラウンドはやはり波乱の幕開けとなった。1本目から、縦回転や斜め軸の回転の横回転をミックスさせた高難易度のトリックを炸裂させ、バランスを崩すライダー、難しいランディングにより着地でボードコントロールを失う外国人ライダーが続出。「このままでは、外国人が予選ラウンドですべて姿を消すんじゃないか」と思わせる、まさかの展開が目の前で無理広げられた。しかし、さすが世界のトップ。セバスチャン・トータント、セップ・スミッツ、マーク・マクモリス、チャズ・グルデモンド、ピートゥ・ピロイネン、イェルムン・ブラーテンらが、2本目にはきっちりと高難度トリックをあっさり決め、クォーターファイナル進出を決める。この大会の常連とも言えるアンティ・アウティは、ここで姿を消した。日本勢は、熊崎圭人がSWBSダブルバックサイドロデオ900をメイク。そして藤田一茂は、FS1080をランディングでボードが90度ドライブしたものの、脅威の身体能力で踏ん張り、ベスト8に勝ち進んだ。

クォーターファイナルのファーストヒートは藤田一茂×セバスチャン・トータント。藤田は、セバスチャンのBSダブルロデオ1080前の敗れ去ったものの、スタイルのあるフラットスピンで日本人



賞金総額1,000,000円、優勝賞金2,500,000円+車、2位1,300,000円、3位900,000円と、ビッグな賞金と副賞もこの大会の魅力。これだけのビッグマネーをゲットできるイベントは世界でも数少ない

の存在感を大きくアピール。セカンドヒートは、セップ・スミッツ×イエルムン・ブラーテンは、セップが余裕の貫禄勝ち。サードヒートは、熊崎圭人×マーク・マクモリス。熊崎は予選ラウンドで見せたSWBSダブルバックサイドロデオ900を打ってきたが、マークのBSダブルコーク1080に、わずか16点という差で姿を消した。両者とも自分のスタイルをアピールするかのように高難度トリックを炸裂させ、最高のトリックを見せ合った意地と意地のぶつかり合いだった。フォースヒートは、チャズ・グルデモンド×ピートゥ・ピロイネンという屈指の好カード。ファイナルと言っても過言ではない組み合わせだ。昨年優勝のピートゥは、1本目で伝家の宝刀ダブルコーク1080を炸裂させたが、チャズの2本目で繰り出した意地のフラットスピンBS1260の前に、わずか2ポイント差で敗れ去った。チャズは、ピートゥの2回目の優勝の野望を砕いた。

そして、セミファイナルの組み合わせは、セバスチャン×セップ、マーク×チャズという組み合わせになった。セバスチャン×セップは、セバスチャンが1本目になんと282ポイントという高得点をたたき出しファイナルに駒を進めた。マーク×チャズは、マークがBSダブルロデオ1260に果敢にチャレンジしたものの完成度が低く、チャズがBS1260前に敗れ去った。

スーパーファイナルは、チャズ×セバスチャンの闘いとなった。セバスチャンは、1本目からバックサイドダブルロデオ1080を打ったが失敗。これを見たチャズは、1本目からまたもやBS1260を繰り出しメイク。1本目からセバスチャンにプレッシャーをかける。触発されたセバスチャンも、またもやバックサイドダブルロデオ1080を打ったが失敗。ここでチャズの優勝が決まった。そして圧巻だった、優勝を決めたにもかかわらず、チャズは2本目にBS1440にチャレンジ。失敗はしたが、TOYOTA BIG AIR史上初めての1440のチャレンジは、多くのオーディエンスの記憶に残された。

ダブルコークやダブルロデオといった派手なトリックが主流になっている昨今、最後まで自分の限界に挑戦するかのようにバックサイドスピンにこだわったチャズの姿が、クールにかっこよく見えた2011年のTOYOTA BIG AIRであった。



2.Run/249Point

藤田一茂



Winner

1.Run/280Point

**TOUTANT
Sebastien**



1/4 Final Round 1st Heat



1.Run/109Point

BRAATEN
Gjermund
(NOR)

Winner

2.Run/263Point

SMITS
Seppe (BEL)



1/4 Final Round 2nd Heat



2.Run/245Point

熊崎圭人 ×

Winner

2.Run/261Point

MCMORRIS
Mark (CAN)



1/4 Final Round 3rd Heat



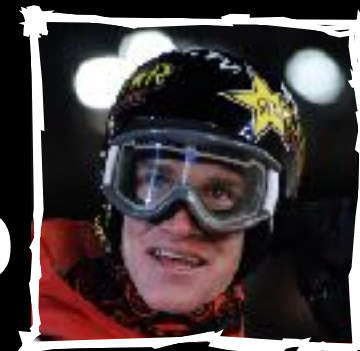
1.Run/276Point

PIIROINEN

Winner

2.Run/278Point

GULDEMOND
Chas (USA)



1/4 Final Round 4th Heat



2.Run/227Point

SMITS
Seppie (BEL)

×

Winner

1.Run/92Point

TOUTANT
Sebastien



1/2 Final Round 1st Heat



2.Run/234Point

MCMORRIS ×
Mark (CAN)

Winner

2.Run/261Point

GULDEMOND
Chas (USA)



1/2 Final Round 2nd Heat



1.Run/92Point

TOUTANT
Sebastien

Winner 優勝

2.Run/268Point

GULDEMOND
Chas (USA)



Final Round